



TITLE:

# 最近人口静態統計

AUTHOR(S):

大山, 壽

---

CITATION:

大山, 壽. 最近人口静態統計. 經濟論叢 1915, 1(1): 140-144

ISSUE DATE:

1915

URL:

<https://doi.org/10.14989/126858>

RIGHT:

京都帝國大學法學科大學

# 經濟論叢

第一號

第一卷

## 論說

●貧富問題(一)

●でうゐつゝ・ひゆーむノ經濟學說(二)

●地代ノ性質ニ就テ

●地方財政ノ調整

## 雜錄

●減債基金ト鐵道資金

●獨逸ノ自治制ニ就テ

●戰爭ト社會問題

●津村博士ノ國民經濟學原論ニ就テ

## 雜報

●租稅ノ新傾向

●佛國ノ外國放資

●佛國植民地ノ現勢

●著名ノ婦人ニ關スル統計的研究

●麥ノ收穫ト米價

●最近人口靜態統計

●日本經濟叢書第十二卷ヲ讀ム

●和田垣教授在職二十五年祝賀

●Robert Meyer 逝ク

●ひにーる・るわばーりゆー氏ノ陳亡

法學博士 田島 錦治

法學博士 福田 德三

法學博士 戸田 海市

法學博士 神戸 正雄

法學博士 小川 郷太郎

教授 財部 靜治

講師 米田 庄太郎

法學博士 河上 肇

法學博士 神戸 正雄

法學博士 小川 郷太郎

助教授 山本 美越乃

法學博士 河上 肇

講師 高田 保馬

法學士 大山 壽

法學士 本庄 榮治郎

法學博士 神戸 正雄

法學博士 小川 郷太郎

法學博士 織田 萬

## 最近人口靜態統計

法學士 大山 壽

內閣統計局最近ノ調査ニ係ル大正二年十二月三十一日現在ノ我國人口靜態統計ハ、漸次發表セラレツツアレバ、今ソレ公ニセラレタル所ニ依リ左ニ我國人口ノ趨勢ヲ窺ハントス。惟フニ我國人口靜態統計ニ於テ主要ナル二種ノ人口數アリ。一ハ本籍人口ト稱シ各府縣及北海道内ノ

市町村ニ本籍ヲ有スル者ノ數ニシテ現ニ住居スル地方ノ如何ヲ問ハズ、從テ各府縣若クハ北海道内ニ住居スルモ其所ニ本籍ヲ有セサル外國人及内國人ヲ含マザルニ反シ道府縣内ニ住居セズシテ新領土若クハ外國ニ住居スルモ道府縣内ニ本籍ヲ有スル者ヲ包含ス。他ハ現住人口ト稱シ之ニ二種ノ別アリ、一ハ甲種現住人口ニシテ他ハ乙種現住人口ナリ、前者ハ道府縣内ニ本籍ヲ有スルト否トヲ問ハズ現ニ其所ニ住居スル國民ノ數ニシテ本籍人口ヨリ出寄留ヲ控除シ入寄留ヲ加算シタル算出數ナリ、後者ハ出入寄留ノ届出ガ勵行セラレザル結果トシテ生シタル甲種現住人口ノ不正確ヲ矯正センガ爲ニ一定ノ標準ニ依リ之ニ加工シタル推定數ニシテ比較的實際ニ近キ現住人口ト見做サル。此如キ二種ノ人口數ノ性質ニ依リテ考フルニ、本籍人口ハ日本國民ノ發展力ヲ表示シ現住人口ハ日本國土ノ包擁力ヲ表示スルモノト觀ルヲ得ベシ。

而シテ統計局ノ調査ニ依レバ大正二年末ニ於ケル本籍人口ハ男二六、九六一、〇三二人、女二

六、三九五、二七三人、合計五三、三五六、二九五ナリ、先ツ男女兩性ノ人口的關係ヲ比較觀察センガ爲ニ之ニ對シ、過去ニ於ケル各五年毎ノ本籍人口ヲ左ニ示スベシ。

調査ノ時 男 女 女百ニツキ男

明治五年一月二十九日	二七、九六八、四〇〇	一六、三四一、六三二	一〇三・九五
同 七年一月 一日	二七、〇五五、五六一	一六、七五七、一四〇	一〇三・八七
同 十二年同	一八、一三七、七三三	一〇、六四三、五三二	一〇三・九二
同 十七年同	一八、九五四、七六〇	一〇、四九六、九七七	一〇三・四七
同 廿一年十二月卅一日	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、五九八、七六九	一〇三・〇九
同 二十六年同	三〇、九〇六、四四三	一〇、四八一、八八八	一〇三・〇七
同 三十一一年同	三三、〇四八、四三三	一〇、三六九、六三三	一〇三・七
同 三十六年同	三三、六〇〇、六〇〇	一〇、三三一、三三三	一〇三・三
同 四十一年同	二五、〇〇六、六六〇	一〇、四四四、四四四	一〇三・五
大正二年同	二六、九六一、〇三二	一〇、三三三、二二二	一〇三・五

之ニ依テ觀レバ男子ノ數ハ常ニ女子ノ數ヲ超過シノ差ハ各年ヲ通シテ大約五十萬人ナルガ最近ニ於テハ五十六萬六千九百九十四人ニシテ兩者ノ比例ハ女一〇〇・ニツキ男一〇二・二五ナリ。而シテ此比例數ノ趨向ヲ觀ルニ、明治五年ノ初ヨリ最近ニ至ル四十二年間ニ於テ男子超過ノ程度最も高キハ明治五年ノ女一〇〇・ニ對スル男一〇二・九五ニシテ最も低キハ同二十一年ノ女一

○ニ對スル男一〇・七七ナルガ、其間ニ一定ノ傾向アルヲ看取セザルヲ得ズ、即チ明治五年ヨリ同三十一年ニ至ル二十七年間ニ於テハ十二年ヲ例外トセバ男子超過ノ程度ハ常ニ漸減シ來リ最初ノ一〇・二九五ヨリ一〇・一七七ニ減少セリ、然ルニ明治三十一年末ヲ一轉機トシテ反對ノ傾向ヲ取り以後十五年間ニ於テハ男子超過ノ程度ハ漸増シ來リ最近ニ於テ一〇・二一五ニ増加セリ。尤モ後年ニ於ケル男子超過ノ程度ヲ觀察スルニ當リ戶籍法ニ依ル事情ヲ顧慮セザルベラス。即チ從前ハ行衛不明トナレル高齢者ニシテ戶籍上八十歳以上ニ達スルトキハ之ヲ戶籍ヨリ抹消セシモ、現行戶籍法ニ於テハ行衛不明者モ失踪ノ宣告ヲ受ケザル間ハ永久ニ戶籍ニ存在スベク、然カモ男子ハ女子ヨリモ行衛不明トナルベキ機會多ク、從テ男子ノ數ハ女子ノ數ヨリモ遙カニ多クノ虛數ヲ包含スルモノト觀ザルヲ得ズ。是レ男子超過ノ程度ノ増加ニ影響スル一事情ナリ。

次ニ我國人口増加ノ情況ヲ觀ルニ、大正二年

末ニ於テ本籍人口ハ五三、三五六、七八八ナルガ其内過去五年間ニ於テ増加セル人口ハ三、七六七、九八四人ニシテ其毎一年ノ増加率ハ一、〇〇〇人ニツキ一四・七六人ナリ、而シテ現住人口ニ於テ甲種ハ五五、一二五、二七二人其内過去五年間ニ増加セル人口三、三八二、七八六人ニシテ其毎一年ノ増加率ハ一、〇〇〇人ニツキ一・七五人ナルガ、乙種ハ五二、九一、八〇〇人其内過去五年間ニ増加セル人口三、五九二、八〇〇ニシテ其毎一年ノ増加率ハ一、〇〇〇人ニツキ一四・一七人ナリ。左ニ我國人口發展ノ趨向ヲ觀察センガ爲ニ過去ニ於ケル各五年末ノ人口靜態ヲ對比スベシ。(現住人口ハ十位以下四捨五入セリ、増加歩合トハ每五年ニ於ケル毎年ノ千人ニ對スル平均増加歩合ナリ)			
調査ノ時	本實數	増加歩合	實數
明治五年一月廿九日	五三、三五六	—	—
同 七年一月一日	五三、六五八	七・四	—
同十二年 同	五五、一七六	二・四	—
同十七年 同	五七、五七六	四・四	—
同廿二年十二月卅一日	六〇、〇七六	四・三	—
同二十六年 同	六二、八六六	四・六	—
	六二、八六六	—	—

同三十二年同 四七、三三、八五 二・三 四七、三三、八五  
 同三十六年同 四七、三三、八五 二・三 四七、三三、八五  
 同四十二年同 四七、三三、八五 二・三 四七、三三、八五  
 大正二年同 四七、三三、八五 二・三 四七、三三、八五  
 之ニ依テ觀レバ最近五年間ノ増加ハ最モ著シ  
 ク從來其比ヲ見ズ、而シ明治五年以來四十二年  
 間ニ増加セル人口實數ハ實ニ二〇、二四五、九九  
 二人ニシテ最近大正二年末ノ人口ハ明治五年ノ  
 スレニ比シ六一・一五「パーセント」ヲ増加セル割  
 合ナリ。而シテ此四十二年間ニ於ケル各五年間  
 ノ人口増加歩合ニ一定ノ傾向アルヤ否ヤヲ觀察  
 スルニ、各期間ニ於ケル増加率ハ一高一低シ其  
 間ニ何等ノ規律ヲ發見シ能ハザルガ如キモ、仔  
 細ニ觀スルトキハ明治二十六年末ヲ界トシ其前  
 後ニ於テ増加率ノ傾向ヲ異ニスルヲ觀ル。即チ  
 前ノ二十二年間ニ於テハ明治十二年ノ一二・四  
 三ヲ最高トシ同七年ノ七・七四ヲ最低トシ増加  
 率概シテ低キモ、後ノ二十年間ニ於テハ明治三  
 十一年ノ一一・二一ヲ最低トシ大正二年ノ一四・  
 七六ヲ最高トシ増加率概シテ向上セルヲ觀ルト  
 キハ大體ニ於テ人口増加率ハ明治ノ前半ニ於ケ

ルヨリモ後半以後ニ於テ増進シツツアルヲ看取  
 シ得ベシ。殊ニ三十一年末ヲ以テ終ル五年間ニ  
 ハ人口増加ヲ妨グベキ日清戰爭アリ又四十一年  
 末ヲ以テ終ル五年間ニハ更ニ大ナル人口増加ヲ  
 妨グヘキ日露戰爭ノアリシコトヲ顧慮スルトキ  
 ハ、少クモ大正二年末ニ至ル最近二十年間ニ於  
 テ我國人口ノ増加率ハ概シテ漸増ノ傾向ヲ有ス  
 ルモノト云フヲ得ベキカ。而シテ本籍人口ガ現  
 住人口ヲ超過スル部分ハ日本國民ガ新領土若ク  
 ハ外國ニ發展セル形跡ヲ示スモノト概言スルヲ  
 得ベク、大正二年末ヲ以テ終ル五年間ニ於テ其  
 數四四四、九八八人ニシテ其増加歩合ハ毎年千  
 人ニツキ・五九人ハ兩種人口増加歩合ノ差ナリ。  
 人口増加ノ趨勢此如シトセバ其結果トシテ我  
 國民人口ノ密度ハ如何ナル變化ヲ蒙リタルカラ  
 觀ルニ、密度増加ノ傾向ハ人口増加ノ傾向ト全  
 ク其步調ヲ一ニス。即チ左ノ如シ。

調査ノ時	現住人口	一方里ニ	同上
	(乙種)	付キ人口	増加數
明治十七年一月一日	三七、四三、八〇〇	一、五〇	
同二十一年十二月三十一日	四七、六六、〇〇〇	一、五八	六

同 二十六年同	同 三十二年同	同 三十六年同	同 四十二年同	大正二年同
同 二十六人	同 三十二人	同 三十六人	同 四十二人	同 四十二人
同 二十六人	同 三十二人	同 三十六人	同 四十二人	同 四十二人
同 二十六人	同 三十二人	同 三十六人	同 四十二人	同 四十二人
同 二十六人	同 三十二人	同 三十六人	同 四十二人	同 四十二人

人口ノ密度ハ大正二年末ニ於テ一方里ニ付キ  
二、一三四人トナリ明治十七年來三十年間ニ於  
テ實ニ六二、四四人ヲ増加セリ。而シテ人口密度ノ  
各五年間ニ於ケル増加數ハ人口増加率ト同一ノ  
傾向ヲ有シ同一ノ説明ニ依リ二十六年以後ニ於  
テ漸増セルモノト觀ルヲ得ベキカ。

尙ホ終ニ大正二年末ニ於ケル我國最近ノ人口  
及其増加率ヲ諸外國ニ於ケル最近ノ調査ニ係ル  
人口ニ比較シ、世界ニ於ケル我國人口ノ地位ヲ  
示スベシ、即チ左ノ如シ、(増加歩合トハ前回ノ調査以  
後此調査ニ至ル期間ニ於ケル毎年ノ平均増加歩合タルコト前ニ  
我國人口ニツキテ言ヘル所ニ同ジ國名ノ下ノ數ハ増加歩合ノ順  
位ヲ示ス)

國	調査ノ時	人口	毎年平均 増加實數	同上 歩合
新西蘭(一)	一九〇〇・四・二	一、〇〇、〇〇〇	二、三、七五	二・三
亞爾然丁(二)	一九〇〇・五・一〇	一、〇〇、〇〇〇	一〇、一、七五	一〇・一
米 國(三)	一九〇〇・五・一〇	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇

伯刺西蘭(四)	一九〇〇・四・五	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
濠洲聯邦(五)	一九〇〇・四・五	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
塞爾維(六)	一九〇〇・三・三	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
智 利(七)	一九〇〇・二・八	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
羅馬尼(七)	一九〇〇・三・九	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
日 本(八)	一九〇〇・三・三	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
勃牙利(九)	一九〇〇・三・三	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
和 蘭(一〇)	一九〇〇・三・三	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
露 西(一一)	一九〇〇・三・九	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
丁 抹(一二)	一九〇〇・三・一	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
瑞 西(一三)	一九〇〇・三・一	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
白牙義(一四)	一九〇〇・三・三	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
英吉利(一五)	一九〇〇・四・五	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
澳 匈(一六)	一九〇〇・四・五	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
葡 牙(一七)	一九〇〇・三・一	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
瑞 典(一八)	一九〇〇・三・三	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
希 臘(一九)	一九〇〇・四・七	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
伊 太(二〇)	一九〇〇・六・一〇	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
諾 威(二一)	一九〇〇・三・三	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
西 班(二二)	一九〇〇・三・三	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇
佛 蘭(二三)	一九〇〇・三・三	一、〇〇、〇〇〇	一、〇、一、七五	一・〇

此表ニ依テ觀レバ、新西蘭以下最初ノ五箇國ハ人口増加率最も多ク二六・五ヨリ一六・六ノ間ニアリ、之ニ次ギテ増加率多キハ塞爾維以下第二ノ五箇國ニシテ其増加率ハ一六・〇ヨリ一四・七ノ間ニアリ。和蘭以下第三ノ五箇國ハ中間ニ位シ其増加率一三・八ヨリ一二・四ノ間ニアリ、白耳義以下第四ノ五箇國ノ増加率ハ漸ク低下シ一〇・三乃至七・二トナリ、希臘以下第五ノ五箇國ハ増加率最も少ク七・一乃至一・八ナリ、然レバ一三・八乃至一二・四ハ各國ニ於ケル人口増加率ノ中數ナルガ、我國ノ増加率ハ一四・七ニシテ此中數ノ上ニアリ比較的高位ヲ占ム。而シテ増加率ハ概シテ所謂植民國ニ於テ最も多ク次キニ斯拉ヴ民族ノ國ニ於テ多クノルマン民族ノ國ニ於テ之ニ次ギラテン民族ノ國ニ於テ最も少キ傾向アルガ、我國ノ増加率ハ斯拉ヴ民族ノソレニ近似シ、又文明國中最モ高率ナルモノノ一ニシテ右表ニ掲ゲタル二十五箇國中ニ於テハ第八位ニ在ルモ所謂世界ノ一等國中ニ於テハ米國ニ次ギ第二位ヲ占ム。

雜報

之ヲ要スルニ最近ニ於ケル我國人口ノ趨勢ハ男女ノ比例ハ女子一〇〇ニ對スル男子一〇二・一五ニシテ男子超過ノ程度ハ從前ヨリ少シク増加シ、人口増加ノ程度ハ實數ニ於テ毎年七・五三・五九六人歩合ニ於テ毎年一四・七六ニシテ從來曾テ見サリシ高度ヲ現シ、人口ノ密度ハ一方里ニツキ二・二三四人トナリ其増加ノ程度ハ人口増加ノソレト同一ニシテ從來ニナキ高度ヲ示セリ。而シテ人口増加ノ程度ハ世界各國ノソレニ對比シ頗ル優秀ナル地位ニアルヲ見ルナリ。

(大正四、六、八記)